亡命作家ハインリヒ・マンの位置

山口　裕

（序）

亡命文学を論じる時には、まして亡命時代のハインリヒ・マンを問題にするとなると、ドイツ人民戦線の問題を避けて通ることはできない。しかし人民戦線をめぐって、何度目の会合で何年何月何日にどこで誰と誰が集まって、どのような宣言をしたかというような事実は、すでに細部にわたって調べがついている。違うのはこの運動が挫折に終わった原因を社会民主党の側の意図的な妨害にあるとみなすか、共産党が主導権を取ろうとする動きが強引すぎたからで、そこにコミンテルンの戦術変更と独ソ不可侵条約の締結があったからだとするかであり、当然のことながら結論はこれまで完全に対立していた。従って仲介役を買って出て人民戦線準備委員会の議長になったハインリヒ・マンがウルブリヒトを全面的に信頼して、共産党とソヴィエト体制への衷心からの信頼を語ったのか、それともウルブリヒトの強圧的な態度に不満を抱き、ソ連と共産党に対する共感というのも留保条件つきのものだったのか、この点についても同じ資料によった場合でも、逆の解釈が成立することになる。だが、これはいうまでもなく当然なのである。

戦後四〇数年つづいたハインリヒ・マン研究のゆがみ、この作家の解釈に表れた東西対立の不幸な歴史は、その原因をさぐっていくと、この作家が共産党のシンパとみなされたという事実につきあたる。その場合彼の亡命時代がとくに問題になってくる。すなわち、彼の「革命的労働者階級へいたる道」は、フランス亡命、とりわけ人民戦線運動の過程で完成されたと見られているから、亡命時代のこの作家に対する評価は激しく対立し、そもそも彼に対する共感も反感もこの評価に依存する場合が多いという結果を生んでいる。

たとえば一九七一年DDRの芸術アカデミー発行のアルバイツヘフテ8は、統一テーマ「歴史の転換期に位置するハインリヒ・マン」の下に作家の生誕百年を記念して四六編の研究、報告を集めてその作品と生涯の全局面にわたって論じたが、冒頭の基調報告をかつての亡命文学者、当時の文部官僚であるA・アーブッシュは、次の言葉で締めくくっている。（強調はアーブッシュ）

「ハインリヒ・マンはわれわれ社会主義の文学と文化のために多大の貢献をなし、この貢献によって一社会主義国家の本質的特徴は明確に形をとるにいたったのであります。（中略）この点にこそ彼の作品の偉大さがあるのであります。」[1]

矛盾に富むこの作家の魅力をなんとも荒っぽく裁断したものだが、こうして一方的にわれわれこそはハインリヒ・マンの遺産の正当な継承者であるとする宣言は、その反動として西側にこの作家への無関心な態度を植えつけ、助長することとなるが、同時に次のような見方が西側に存在することと表裏の関係にあったと言える。同じく作家の生誕百年を記念してリューベックで開かれた「ハインリヒ・マン学会」で会議の主催者で、研究報告の発行人でもあるK・マティアスは、全体の結びの報告で、共産主義者たちがこの作家を英雄に祭りあげていること

とにふれて、過大に評価するよりは過少評価や黙殺の方がまだしもよい、この作家が顧みられないのは当然なのであると言い、この作家の作品を連邦共和国にも広めようとする研究者たちに反論している。

「共産主義に属する晩年のハインリヒ・マンは、あのイデオロギー、すなわち自由を抑圧する東の体制を支持して、そのことで利益を得ているイデオロギーにゆだねておくのが妥当なのです。[2]」（強調は筆者）

このような主張を見ているとハインリヒ・マンは党員作家なのかと誤解しかねないが、他方この作家の政治論は現実離れの古い理想主義だから、亡命の状況下では無力だったのだとする議論が現れたりするから、話はややこしいのである。[3] ハインリヒ・マン研究は、いまだに基本的な事実の解釈をめぐって定説がないという段階にある。

ところが、アーブッシュのタイプの議論にしても、マティアスの流儀に分類できるものにしても、どちらにも入らない第三のタイプの場合も、ハインリヒ・マンの当時のエッセイ（講演、ビラ、回想録などを含む）を具体的に分析して結論を出したものが、意外にもと言うべきか当然とみなすかはともかく、少ないのである。論拠を省略しているか、エッセイからの機械的引用に終始して、背後の情勢や作家の発展が視野に入って来ないものが多い。言うまでもなく我田引水の結論や先入観が先にあるからで、議論が泥仕合の印象を与えることがあるのもそのためである。ここでも二三例をあげておこう。

「アルバイッヘフテ」所収のW・キースリングの『KPDの側にいるハインリヒ・マン』は、ハインリヒ・マンが共産党に接近したのはある時期にかぎられるとか、党への接近を彼の素朴な誤りだとする西側の誹謗は的はずれであって、作家はフランス亡命の初期から死にいたるまで共産党に信頼をもちつづけていたのだと力説して

いる。しかし彼があげる資料はエッセイではなく、主としてSED中央委員会アルヒーフ所蔵のハインリヒ・マンの手紙にかぎられているから、反論の可能性を意識的に排除したものと思われる。また、党関係者あての私的な手紙のみに頼るのは、手紙には外交辞令的な表現もあって、雑誌に発表されたエッセイのような資料としての信頼度はないと言わねばならない。(4) ゲルト・バウアーは西でハインリヒ・マン受容が遅れている現状に憤慨しながら、西の研究者にはめずらしく、作家がいかに共産党に親近感をもったかを論じるが、エッセイの引用が大量に並ぶばかりで、その引用の部分を見るかぎりではたしかに作家が共産党を信頼しているように見えもするが、引用の解釈がまったく見られない。作家がどんな文脈で用いた言葉なのか、どのような意味をこめて用いた言葉かの考察がなければ、問題が作品の解釈などと異なる次元にある場合でも、説得力に欠けるのである。(5) もう一人共産党への接近を強調している例をあげると、W・ヘールデンの『精神と権力――ハインリヒ・マンの労働者階級への道』所収の諸論文は、副題が示す通り結論は最初からはっきりしているのだが、エッセイの引用がバウアーの場合とは逆に、作家が共産党へ信頼を寄せたとする証拠としては弱いものが多い。(6) 他方作家の作品を高く評価しながら、その共産党との関係を一時的なもので、政治の素人が犯した素朴な過ちとする立場をとる者は、エッセイにはふれたがらないで、数少ない、しかし知られている手紙に頼る傾向がある。

ハインリヒ・マンの亡命時代の評価は、共産党との関係をめぐってこれまでのところきびしい対立が見られた。ドイツ統一によりひとつのタブーが消滅し、資料の東側による独占もなくなったいま、われわれは亡命文学研究とハインリヒ・マン研究の分野に望ましい変化が起こることを期待してよいのであろうが、この機会に彼のエッセイがどのようなものであったのか、共産党との関係が実際はどうだったのかを検討して、エッセイの内容に則

して彼の亡命時代の活動を総括しておく作業が必要だと思われる。彼が困難な局面で人間的な誤りを犯したとしても、それを拡大解釈する立場も隠蔽する立場も作家を正当に評価する態度とは言えないだろう。以下にエッセイの背後の亡命作家ハインリヒ・マンの活動を素描しつつ、エッセイの分析を試みたい。

（一）　フランス亡命初期の活動

まず、ハインリヒ・マンの亡命の事実と亡命文学者たちの動きを、周知のことも多いが確認しておかねばならない。

彼の亡命の日付については異説があるが、回想録『一時代は検閲される』を信じるなら、国会放火事件（一九三三年二月二七日）の五日前の二月二二日のことである。すでに社会民主党と共産党との選挙での共同闘争へのアッピールに署名して芸術アカデミーを強制退会（二月一五日）させられ、身の危険を感じていた彼が亡命を決意したきっかけは、フランス大使フランソワ＝ポンセがフランス外務省の保護を暗示した言葉「もしパリ広場を通って行かれるなら、私の家は開いています。」だったという。二月二一日の早朝、家は常時見張られていたので、雨傘だけもってぶらりと家を出て、怪しまれないためにフランクフルト（アム　マイン）までの切符を買った彼は、同棲していたネリイ・クレーガーがあとから持ってきてくれた荷物を受け取り、当日はフランクフルトに一泊して翌二二日、放火事件の翌日からはじまる共産党弾圧と大量亡命の時期と違って駅や国境での検問は厳重ではなかったから、さしたる困難もなくフランスへ出国したのだった。彼の亡命はきわめて早い部類に属し、以後彼は二度とドイツの土を踏むことはなかった。

フランスでは彼は曽遊の地ニースにおもむき、その年の夏から四〇年九月にアメリカへ逃れるまで、住みつづける。ワイマル共和国当時から独仏協調をとなえ、再三フランスを訪問して会議に出席した結果、フランスの政治家、文学者の友人を多くもつ彼は、新しい生活への違和感もなく生活と活動の基盤をいちはやく固めることができた、少数の例外のひとりだった。すなわち南フランスに影響力をもつリベラルな新聞「デペーシュ　ドゥトゥールーズ」には、以前から時々寄稿していたが、四月から毎月一回千フランの契約でフランス語の論説を掲載して、ドイツの現状を訴え、警戒をうながした。またオランダのクヴェリードー書店とは、同社最高の月額二五〇グルデンで契約し、一二月には『憎悪』のドイツ語版を出した。

その頃までには主な亡命雑誌も揃いはじめる。「ヴェルトビューネ」がベルリンで三月七日号まで出て発禁になった後、プラハで「ノイエ　ヴェルトビューネ」の最初の号が出たのが四月一四日、シュヴァルツシルトの「ダス　ノイエ　ターゲブーフ」が六月一日、クラウス・マンが主宰して、ハインリヒ・マンがジッド、ハックスリーとともに後援した「ディー　ザムルング」が九月一日、ヴィーラント・ヘルツフェルデの「ノイエ　ドイチェ　ブレッター」（プラハ）が九月二〇日、ゲオルク・ベルンハルトの「パリザー　ターゲブラット」が一二月二〇日というぐあいで、ハインリヒ・マンはこれらの雑誌に時事評論、檄文、ナチス弾劾などの文章を発表してゆく。長編小説『アンリ四世』の原稿は、すでにドイツで書きはじめていたものを、ニースの生活が落ち着いてから、書きつづけた。時々パリ、チューリヒ、ブリュッセル、プラハなどに出かけて集会を司会し、挨拶し、結集を呼びかけ、それらの原稿はまた亡命雑誌に掲載され、またそのなかのいくつかはのちに評論集にも収録される。彼の毎日は多忙で、充実したものだった。当時を回想して彼は書いている。

「わたしは喜んで告白する。亡命の地にあって破滅したドイツへの意味のない憧れに苦しめられたことは一度もなかった。ヒットラーのドイツは、わたしが予定どおり犠牲者のひとりにされなくとも、居残る気にはなれなかっただろう。一方フランスの雰囲気と言葉は、この時点でいちばん望ましいものを与えてくれた。わたしはフランス王の物語をすでに計画していたが、起こった事件やわたしの環境が変わることをそれ以前から計算してそうしていたわけではなかった。(7)」

フランスは彼にはかねてから第二の故郷と思えていたし、ここでの生活と亡命の体験は大作『アンリ四世』を書き進めるためには好都合だったのである。

総じて三四、五年ごろには、亡命者たちは外国での生活にようやく慣れ、態勢をたてなおしていて、彼らの希望を打ち砕くたぐいの事件はまだ多くはなく、ナチスは隆盛の一途をたどっているにもかかわらず、彼らの結束もまた固く、一様にナチス政権の短命を信じていたから、異国での苦難の生活のなかでなお意気さかんなものがあったと要約できるだろう。こうした動きのなかからハインリヒ・マンが直接かかわった主な活動をあげておくと、アルフレート・クレラ、ルドルフ・レオンハルト、アンナ・ゼーガースらとドイツ作家擁護連盟（SDS）のための準備委員会を五月末に発足させ、六月に最初の集会が開かれ、一一月に連盟結成のはこびとなり、ハインリヒ・マンは名誉会長となった。三四年一月一四日にはロマン・ローラン、フォイヒトヴァンガーらとドイツ自由図書館設立準備委員会を作り、ハインリヒ・マンは発起人代表となり、二月二二日に委員会を開き、焚書一周年の五月一〇日に開館、その館長に推された。また三四年四月九日にはペンクラブのドイツ部会の設立が決まり、ハインリヒ・マンが初代会長に選ばれた。三四年一一月二六日チェコのペンクラブの招きでプラハに行った

際にはベッヒャーと会い、人民戦線結成の話をもちかけられ、中心となって活動することと「ノイエ　ヴェルトビューネ」にこれに関連した呼びかけを執筆することを承諾した。ベッヒャーは、この後国際作家会議の準備のためにパリに出かける。三五年六月、三七カ国からの参加者を集め、ハインリヒ・マンも役員のひとりだった作家会議のテーマは、共産党の打ち出した協調路線のために、彼の理想主義とぴったり一致する「文化の擁護」であった。多くの亡命者の希望の象徴、反ファシズムが最高の盛り上がりを見せたこの会議で、老作家が演壇に上がった情景を、A・カントロヴィッチュのよく引用される個所は、次のように伝えている。

「五千人か六千人の人がそのホールにいた。彼らは全員、だれかに合図されたわけでもないのに。起立していた。偉大なドイツ亡命者ハインリヒ・マンを賛えるために、黙って立ち上がったのだ。みんな彼のうちに真のドイツ、自由のために戦う者たちのドイツ、文化の失われることのない価値を世界にゆだね、これからもゆだねるであろうドイツを賛えたのだ。三十秒間ホールの群衆は沈黙していた。それから歓声がまき起こり、それはもはや終わろうとはしなかった。[8]」

この時亡命者たちの目にはこの老作家の姿が、まさしく彼が唱える「戦闘的ヒューマニズム」を体現する者と映ったに相違なく、彼にとっては亡命の時代を通じてもっとも幸福な瞬間であっただろう。A・ベッツは、ハインリヒ・マンが人民戦線運動の代表者として最適と見られた理由をいくつかあげている。すなわち過去にヴィルヘルム二世の体制を攻撃し、ナチスに反対した実績があること、ワイマル共和国で「詩人アカデミー」総裁として名声を得ていたこと、一九世紀小説にくわしく社会小説を書いたこと、高齢のため党派の争いに超然としていられること、フランスの文化人に知己が多いこと、ユダヤ人でもアカでもないことなどである。[9] これらの理由は

すべて、亡命文学者たちが自分たちの運動の中心にいる象徴的存在に寄せる信頼のまなざしの根拠でもあっただろう。彼の情勢判断には、なにも亡命時代にはじまったことではないが、時折誤りがあるけれども、ハインリヒ・マンの読者にはそうした細部はどうでもよいようなところが、表現主義者の一部に尊敬されて詩を献呈されたりした一九一〇年代からあったのである。

三五年の夏の終わりには、なんといっても彼のフランス亡命がもたらした最大の収穫、いやそれどころか生涯の最高傑作で、この作品の前ではナチスへの抵抗を訴えるエッセイ群は光を失ってしまう、長編『アンリ四世』の前半である『アンリ四世の青春』が完成する。そしてこの小説の主題は、まさしく戦闘的ヒューマニズムであった。この頃から人民戦線結成を目ざす動きはようやく活発になりはじめ、一方ニュルンベルクのナチス党大会で「人種法」の制定が発表される。同年一一月二九日国際連盟の委員会で、ハインリヒ・マンは、亡命者を代表して窮状を訴えたが、委員会の対応がにぶく効果はなかった。(10)

W・ヤスパーによれば、亡命初期の三四年の時点で彼は、第三帝国の「人種」に依存する体制が共産党の「階級」を基盤とする体制と「戯画」のようによく似ていると言って、そのモスクワの指令で動く体質を批判して、「インターナツィオナーレ　リテラトゥーア」に攻撃されたし、一方社会民主党は、彼によれば、亡命以前の偏見をそのまま引きずっている。(11)

さて、ハインリヒ・マンのフランス亡命時代の発言の詳細に立ち入る前に、亡命以前の思想と行動を簡単に跡づけておかねばならない。結論を先に言えば、彼はワイマル共和国時代のかなり早い時期に、「大工業家」の寡占体制が国家主義と戦争の原因であるとの認識に達し、炭鉱国有化のような反資本主義的主張を小説やエッセイ

で展開した。(『一九二三年の悲劇』、長編小説『首脳』など)[12] しかしこの認識は、当時の何人かの作家の場合と違ってマルクス主義との出会いによるものではなく、フランスの作家、思想家たちの著書に親しんだ結果であったから、資本家や軍部への風刺が過激で右翼の動きの指摘が正確であっても、解決策は知識人が政権の座につくことであり、「理性の独裁」であるという彼独特の理想主義であった。彼には理論家、分析家の素質はなく、現実の政治情勢にもうとく、彼の理想は奇妙に聞こえるだろうがフランス革命であり、一八世紀フランスの啓蒙思想だったのである。彼が一九二四年に選挙民に呼びかける文章を発表して、憲法擁護と「共和派」への投票を訴えた時も、熱烈な共和主義者を自認し共和国擁護の論陣を張った彼は、中道で中産階級の利益代表である民主党を支持して、社会民主党や共産党とは一線を画している。[13] 当然彼は労働者大衆の生活にも利害にも無知であった。

「自由」と「平等」が侵害されている「不正」に抗して「行動」するという知識人像の原型は一九一〇年の『精神と行動』『ヴォルテール対ゲーテ』の時に完成しており、「知識人」とりわけ「作家」は「民衆」とはっきり区別されている。知識人が行動して民衆がこれに従うフランスの知識人にならおうというのが、彼の行動主義のはじまりだった。この「知識人」の過剰なまでの使命感は、第一次大戦前後の平和主義から共和国末期の反動司法批判キャンペーンにいたるまで、さらにはあとで見るように、小説の主人公アンリ四世の造型から人民戦線への結集の呼びかけにいたるまでの彼を支えたものでもあった。以上がフランス亡命時代のハインリヒ・マンのエッセイのいわば背景をなす、彼の活動であった。彼の共産党に対する態度は、亡命の困難な状況下、とりわけ人民戦線の仲介役をつとめる過程で、どのように変化したのだろうか。そして変革のために要請される「知識人」の過大な役割は、労働者の行動こそが革命を可能にするというように変わったのであろうか。次章以降彼のエッセ

イに則して、具体的に検証することとしたい。

（二）『憎悪』

三三年一二月クヴェリードー書店から出た『憎悪』は、亡命作家の評論集のなかではもっとも早いもので、その激しいナチス弾劾と挑発、明確な態度表明は、当時意気阻喪気味であった亡命者たちを勇気づけ、結束をうながすものであった。亡命雑誌にはいくつも書評が出たし、プラハとモスクワではさっそく翻訳が計画され、ロシア語版はのちに五万部を売った。彼は、さらに『その日は来る』（三六年）、『勇気』（三九年）を出すが、それらは反響の大きさにおいて最初の小さな評論集を越えることはなかった。それはともかく『憎悪』所収のエッセイ群を見ると、すでに亡命作家ハインリヒ・マンの総数三八〇編に達すると言われる――むろんひとつの作品がいくつもの新聞、雑誌に発表された結果であるが――時事評論、呼びかけなどに見られる特徴のほとんどを見てとることができる。

『憎悪』のタイトルはゾラの『わが憎悪』にならったと言われ、ただしナチスが抱く憎悪の意であるが、まずフランス語版が三三年一〇月パリのガリマール書店から出て、この方は大した反響がなかったが、二カ月後に増補してドイツ語版を出したものであった。『憎悪』のナチス風刺に憤慨したドイツの新聞からクヴェリードー書店に圧力がかかり、以後ハインリヒ・マンの評論集で同書店から出たものはなかった。

『憎悪』には「ドイツ同時代史」の副題と「わが祖国に」の献辞がついており、全体は三部に分かれている。まず「破局の前に」と題する序章は、三二年一二月、つまり亡命以前のドイツで「ノイエ　ルントシャウ」に掲

載された長文のエッセイ『超国家的なものへの信仰告白』がおかれている。そしてこの部分はフランス語版にはなかったものである。「その後」と題される主要部分はドイツの現状を暴露し、糾弾する一一編の論説からなっており、そのうち七編はすでに発表ずみのもので（「デペーシュ　ドゥ　トゥールーズ」掲載のものが五編）、書き下ろしは四編（ヒットラー、ゲーリング、ゲッベルス、パーペンらの正体をあばく三編と、ユダヤ人迫害を論じた一編）である。最後に「付録」として「ナチスの生活の諸場面から」と題する書き下ろしの対話体の文章が六編あり、ブレヒトの『第三帝国の恐怖と貧困』（四五年）のミニアチュア版であると言えば、およそのイメージは得られるであろうか。ただしその中の二編だけはゲーリングとゲッベルス、およびヒットラーとヒンデンブルグを主な登場人物としているから、ブレヒトの「場面」とは趣きの異なったものになっている。

さて、冒頭の「破局の前」が加えられたことは、ハインリヒ・マンのワイマル共和国時代と亡命時代の政治評論の連続性を観察するには――この連続性が指摘されることがないのは奇妙なことと言わねばならない――好都合である。『超国家的なものへの信仰告白』は、ナチスの跳梁を見て共和国の崩壊を予感して書かれたもので、なお希望と勇気を語りつつもドイツへの訣別の書ともなり得ているという、彼のワイマル共和国時代の主張の総決算の書である。

彼によれば、現代は「非合理主義」の時代であり、この時代は世紀末ごろにはじまったもので「共和主義者のいない共和国」の現在その最悪の時期を迎えているが、一九四〇年ごろに終わるだろうという。「国家主義」は、かつてはフランス革命とともに自由と開放を指向する進歩の原理であったが、もはや古びてしまって、「独占資本主義」と結託して、国民を抑圧し、国家間の無知と「憎悪」をかきたて、「理性」「知性」を敵視して、戦争を

準備している。「国民国家」を捨てて「国家連合」を、手はじめにドイツとフランスの連合国家を作らねばならない。そのことによって「理性の時代」を招来しなければならない。そのために彼は民衆に先がけて「知識人」に新しい理念への信仰告白の「勇気」を要請する。信仰告白こそは、現状を変える唯一の有効な行動なのであるから。かくして作家は「超国家的」理念を信ずることを告白する。(14)

この論文ではハインリヒ・マンの年来の主張のいくつかが繰り返されている。すなわちヨーロッパの安全と繁栄にはドイツとフランスの協調が不可欠であるばかりか、ヨーロッパ連合が目ざされねばならないとする主題、知識人の行動こそが民衆の意識を変えるという『精神と行動』以来の主題、「国家主義」が独占資本と結んでいる危険を指摘しながら政治的、経済的分析はおこなわず、「理性」が支配する時代の再来を待望する論調、一〇年代、二〇年代の多くのエッセイはこれらの主題と論調で書かれたものであったが、問題はあとで見るように、ヨーロッパ連合の構想を除く他の主題、論調は三三年以後のエッセイにも見られるという事実にある。ナチスの本質を「精神」を敵視する「非合理主義」と規定し、ナチスの野蛮に「理性」を対置するというのは、彼がワイマル共和国時代に展開した「精神」対「権力」の二元論から必然的に出て来るもので、ナチス批判としてはなまぬるいものであっても、少なくともソヴィエト体制の全面的肯定に由来するのではない、彼独特の視点であった。すなわちこれが彼の自負、つまりわれわれこそがドイツ文化を擁護する「もうひとつのドイツ」なのだという熱情の源泉でもあった。そしてこの視点は『憎悪』の他の諸編にも、さらにそれ以後のナチス批判にも引きつがれている。

『憎悪』の主要な部分を構成する「その後」の一一編は、亡命者の視点から国内の実情をあばき、告発し、揶

揄し、警戒をうながし、さらに読者に事態の正確な認識にもとづいて行動を起こし、抵抗するよう訴えている。厳密に分けることは困難であるが、オリジナルの四編は、独裁者の正体を白日の下にさらそうとし、新聞、雑誌から転載された七編は、「憎悪」、羨望、復讐欲を動因とするナチスのいわゆる「革命」の実態を追及し、横行するテロ行為、でっちあげ裁判、ナチス政権の戦争準備、独裁者の意図などについて啓蒙につとめ、またナチスをはびこらせるにいたった「共和国」と「知識人」の責任にもふれている。

ナチスの蛮行の心理的原因をさぐり、「落伍者」であるヒットラーやゲッベルスの劣等感を風刺の手法であばいて見せる、その凶暴さの裏側にある滑稽さを笑いものにする、彼らの手口にだまされるなと呼びかける一方で、彼らはまともに相手にするに足らぬ連中で軽蔑がもっともふさわしい態度だとする、この見方が結集を呼びかける手段としてもっている限界は早くから指摘されている。しかしともかくハインリヒ・マンのナチス攻撃はその後も同じ形をとることが多かった。作家として成功しなかった「宣伝相」ゲッベルスの「復讐欲」を扱った「落伍者たちの帝国で」の結びの部分を引用しておこう。

「落伍者たちの帝国でふんぞりかえって歩き、他人を踏みつぶすことを許されている者たちすべてを見たまえ。ドイツはその野獣たち、気違いたちを引っぱり出して来たのだ。彼らをよく見て、なおこう言いたまえ。〈ドイツをあるがままの姿で受け入れねばならぬ。これがドイツなのだ。〉と。[15]」

こうした彼の訴えの背景にはつねに楽天的な見通しがある。このような人間性を無視した野蛮な体制に対しては、必ず国内で自由をもとめる人たちが蜂起して、彼らは勝利するに違いないとする確信があって、この確信は、現実のドイツの情報から隔離されたこともあって、大戦直前までつづき、ハインリヒ・マンは武器をとって立ち

上がる人たちを念頭において、非合法のビラ、実用書に擬装した書籍、ラジオ放送の形で訴えつづける。ある調査によれば、そのような擬装のために使われた彼のアッピールは一四編ある。[16]『憎悪』にもまた、国内の読者に訴える姿勢が見られるし、また「その後」の『品位を落とした知識人』はのちに実際に国内向けの文書に収録されることとなった。ただその一編が知識人を扱っている、すなわちナチスの体制に取りこまれ、協力することによって利益にあずかっている知識人を扱っていることは、ハインリヒ・マンの関心のあり方を雄弁に語っている。彼の視線は労働者大衆の方には向けられていないのである。

ここでついでに当時のハインリヒ・マンが共産党をどう見ていたかを物語る一節を引用しておこう。

「ドイツ共産党は自分の役割に順応しきったことは一度もなかった。一人立ちして行動したことはなく、ただモスクワの発する命令に従って来ただけだ。しかしこれはよくない。つまりこの党には自分の使命を心中深く確信しているところがなかった。……」

別の所ではナチスの強制労働に言及してこう言っている。

「今回はナチスの独裁者たちは、共和国のアイデアをではなく、明らかにボルシェヴィキの制度を横どりしたのだ。[17]」

この二つは、いずれも共産党批判の文脈の中にあるのではなくて、話のついでに本音が顔をのぞかせたような部分である。三三年の時点では共産党およびソ連の動きはハインリヒ・マンにとっては、社会民主党の動き同様、二党の共同闘争を訴えたことがあるとはいうものの、まだ大きな関心を寄せる対象ではなかったのだった。彼の関心は「自由」の回復、「文化」の擁護、「理性」の復権にあり、そのためにはまず事実を正確に認識した「知識

人」が民衆に先がけて信仰告白をすることが必要なのだった。

（三）　人民戦線運動の過程で

三五年夏ごろから人民戦線を目ざす水面下の動きは活発になったらしく、やがて九月二六日パリのホテル　ルテーツィアで、彼を議長とするいわゆるルテーツィア　クライスの発足を見ることになるのであるが、彼の共産党への共感と受けとれる表現が散見されるのもこの頃からである。ただし彼の場合は果たしてどこまで分かって言っているのかという疑いがたいていの時はつきまとうのであるが、ともかくいくつかの実例を拾い集めてみよう。

三五年八月モスクワの「ドイチュ　ツェントラールツァイトゥング」に載った『プロレタリアだけが文化と人道主義精神を防衛する』という、表題からしていかにも彼らしい文章では、彼の関心がナチスの野蛮に抵抗する「文化の防衛」にあること、そのためには「社会主義」と「労働者」に頼るほかはないと考えはじめたらしいことがわかる。しかしまだそれが共産党とソ連を意味するとはかぎらない。フランスとスペインの人民戦線の活発な動きがあったからである。

「文学は、好むと好まざるとにかかわらず、全面的に社会主義的になろうとしている。なぜか。社会主義の世界の外では文学が存在を許されないからである。文学は必然的に労働者たちに歩みよる。つまりそこでは人間性が尊重され、文化が防衛されるからである。それに反して堕落した俗物市民の〈第三帝国〉は人間性と文化に対する憎悪の上に築きあげられる。それゆえにその基盤はもろいのである。[18]」

『記念すべき夏』（三六年一月「インターナツィオナーレ　リテラトゥーア」）の次の個所はよく引用されるものである。なお表題は、国際作家会議が成功のうちに終わり、ハインリヒ・マン自身にとっては大作『アンリ四世の青春』の完結を見るにいたった三五年の夏を指している。

「率直な民主主義者なら、事態がいまこういう展開を見たあとでは、マルクシズムのみが現実の民主主義の諸前提をつくることを認識せざるを得ないであろう。真摯な宗教者も自分の信仰が社会主義の中で実現されているのを見る。[19]」

ハインリヒ・マンが共産党に共感を抱くにいたったのは、バルビュスの影響によるとよく言われるが、三六年九月「インターナツィオナーレ　リテラトゥーア」に掲載された『アンリ・バルビュス』には次の表現があり、人道主義、民主主義の理想を守るためにソ連に頼るのだという考え方がここには見られる。

「社会主義はフランス人たちの頭の中で、ちょうどソヴィエト連邦の本質が民主主義であることが明らかになり、新たな現実的なヒューマニズムを告知したその時に、現実のものとなる。[20]」

DDRの研究者たちに頻繁に言及された長大な論文『ドイツの労働者たちの道』（三六年一一月「インターナツィオナーレ　リテラトゥーア」）では、知識人ではなく労働者にナチスへの抵抗運動を期待しているところにハインリヒ・マンとしては進歩の跡が見られ、これ以後何回も国内の労働者に非合法文書で反乱を、ナチスを打倒する「革命」を呼びかけることになるのであるが、この論文自体は、作家が共産党とソ連への信頼を公にした転機を示すものとは言い難く、そういった文脈で引用したくなる表現はない。「革命」と言っても、そこにあるのはフランス革命のイメージである。この論文が東の研究者に好まれたのは、ワイマル共和国時代の社会民主党

を名ざしで批判した個所があるからでもあるだろう。ここまでのエッセイではすべて、共産党とソ連への信頼がストレートに出てくることはない。

一九三七年になると人民戦線への結集を訴える文章が五編発表される。ただしこの年にはすでに運動そのものは前年の勢いを失って、ドイツ亡命者たちの広範な支持を得ているとは言えなくなっていた。まず、ハインリヒ・マンが人民戦線運動に自分の理想を重ね合わせて見ていたことは、たとえば「人民戦線はなによりも単純な事実をもとめる戦いであり、政治的な形をとった道徳的告白である。」(『人民戦線の諸目的』強調筆者)[21]などといった表現を見れば明らかである。人民戦線のための活動が彼を変えていないことがわかる。意外なことに人民戦線への呼びかけは、政党人や知識人たちを対象に具体的な目標を掲げたものではない。『ドイツ人民戦線はなにを欲するか』を例にとると、三七年四月一〇日にパリで開かれた会合での開会の挨拶だったこの講演は、ドイツ国内の労働者たちにナチス打倒のために起てと檄をとばす非合法文書と同じ調子なのである。すなわちそこではハインリヒ・マンは格調正しく自由と人間性の理念を、過去にさかのぼって引き合いに出し、勇ましく決起を要求しているが、情勢分析が完全に誤っているところまで非合法文書とそっくりなのである。[22]つまり反対勢力がますます力を貯え、ナチス政権崩壊の日も遠くないと信じこんで気勢を上げているのである。ここになんらかの意味でハインリヒ・マンの新しい発展を見てとることは牽強附会が過ぎると言うべきであろう。情勢分析の誤りはトーマス・マンにもあったが、ハインリヒ・マンの場合、ミュンヘン会談以後のアッピールでは、チェンバレンの宥和政策に対する反発から、イギリス政府がナチスと手を組んでいると主張さえしている。

ハインリヒ・マンの亡命時代の他のエッセイ全般についても言えることであるが、三六年、三七年の時点で亡

命者たちにとって大問題だったはずの現実の事件がそこにいささかも影を落としていないのが目立つ。ナチスが現実にとった弾圧の手段については、初期の国会放火事件、市民権剝奪、ユダヤ人弾圧などを除けば、この時期の動きで言及されるものはない。同様にソ連をめぐる動きについても、粛清、ジッドの『ソヴィエト紀行』をめぐる論争とフォイヒトヴァンガーの『モスクワ一九三七年』の刊行など、さらにはのちの独ソ不可侵条約も含めて、亡命者たちが自己の存在にかかわる問題と受けとめざるを得なかった事件が、彼のフランス亡命時代の論説からは抜け落ちている。そこにはただ「理念」の次元での訴えが繰り返されているばかりである。ワイマル共和国時代の彼が婦人のモードやスポーツまで論じ、小説にも取りこみ、活発に書評を書いたことを思うと隔世の感があると言わずにいられなくなる。むろん彼は、いろいろな論争を超越した高齢に達してはいたし、意図的に沈黙を守った可能性も否定できないのではあるが、（のちに『一時代は検閲される』では沈黙を破っている）現実から離れたところで希望的観測にもとづいて気勢をあげる「道徳的」要請や決起への要求がせっぱつまった亡命者たちにとって現実にどれだけの力になったのか、これを判断することはむつかしい。

ライヒ＝ラニッキのようにマン兄弟の戦時中のエッセイは全部認めないという見方も可能かもしれないが、[23] ハインリヒ・マンのエッセイは一方では亡命時代のものにかぎらず、状況から切り離して読めば傑作で通るものが多い。エンツェンスベルガーが一九六八年この作家の『政治評論集』を出して、『人民戦線の諸目的』をはじめ『超国家的なものへの信仰告白』、『品位を落とした知識人』、『ドイツの労働者たちの道』などの亡命時代のエッセイもその中に収録したように、革新を望む政治の季節には主題がヴィルヘルム体制批判であろうと、共和国擁護であろうと、反ファシズムであろうと、彼の呼びかけはつねにある種の訴えかける力をもっている。

人民戦線運動の期間を通じて古風な理想主義者ハインリヒ・マンは、社会民主党と共産党のはざまで、「道徳」や「人間性」とは無縁な政治の力学に振りまわされた犠牲者であった。そのことが作家である彼の名誉を傷つけるものではないが、同様の意味での犠牲者はほかにもいたようだ。

ジッド事件をめぐってスターリニズムの悪を知りながら現実的見地からソ連を擁護しつづけたブレヒトがもっとも悪辣だとするH・アーボッシュの主張はおくとしても、[24] 一九五六年フルシチョフのスターリン批判を聞いて衝撃を受けたブレヒトが、死の直前にスターリンを否定する寓意をこめた四つの詩を書いたという話には、唯物史観にもとづく鋭利な批評の数々をものした彼も所詮は国際政治の波に翻弄されたひとりだったのかという感慨をあらためて抱かされるのである。[25]

ある調査によれば、ソ連から入る原稿料は、三六年、三七年にはハインリヒ・マンの収入の約五〇パーセントを占めていたという。[26] フランス、スペインの人民戦線も先行きがますます暗かったことでもあり、彼がソ連を頼るほかはないと考えるにいたったのには無理もない事情があったわけで、果たせるかな人民戦線をテーマとしていないところで、ソ連への決定的な信仰告白と受けとられても仕方がないことを書いている。

「ソヴィエト連邦はひとつの理念が実現を見た一五〇年来最大の実例である。この理念がさらに実現をつづけることを私は疑わない。フランス革命は、その本質的内容がヨーロッパ全体にではなく、西側にだけ浸透するのに百年を要した。プロレタリア革命は同じくとどめることのできない力を人びとにおよぼしつづけるであろう。だがその結果はより広範にわたるものであり、最終的なものとなるであろう。」

「土地の分割、集団化、工業の国有化、労働者と農民を国家を担う階級とみなすこと、これらすべてはまだま

だ世界中で支配的現実となるにはいたっていない。しかし多くの頭脳の中で支配的である。この大陸の最大の国で社会主義が勝利し、その活力を実証したのである。」

引用個所だけを取り出してみると、この作家がついに共産党の陣営へ鞍がえしたと主張することも可能に見えてくるし、事実利用価値は当時も戦後も大いにあったのであるが、前後の文脈を無視しないならば、ハインリヒ・マンが考えていることがあい変わらず同じであることがわかる。この文章は彼が『アンリ四世の完成』の一部を連載中だった「インターナツィオナーレ　リテラトゥーア」に三七年一一月ロシア革命二〇周年を記念して、『実現された理念』と題して（またしても彼らしい）、H・ヴァルデン、J・R・ベッヒャーその他大勢が並べる「美辞麗句」（H・A・ヴァルター）といっしょに掲載されたものである。彼の挨拶の要旨は、完全な民主主義と現実的なヒューマニズムの実現がこの国では可能だという希望を、雑誌の巻頭を飾ったスターリンの演説に読みとったということであり、やはり美辞麗句の域を出ていない。それにしても挨拶の外交辞令もあったであろうが、ナチスと対比しながら「人間とその幸福に敵対するのでなく、それらのためにある国家」が「よりよい、強固な人間性の導入を目ざして」いるとか、「ついにひとつの国が、人間をまさしくわれわれが長いあいだ待ち望んでいたもの、つまり理想的な人間に生まれ変わらせようと企てるにいたり、この理想的人間はみんなして各個人の幸福のためにはたらき、そして各個人はさらに完成をつづける全体の中でより高度の、よりよいものに生まれ変わらねばならない。」などと言い、「知識人」と「プロレタリア」の共同作業という得意の話で締めくくるのを見る時[27]――『アンリ四世』の豊饒な世界を知るだけになおのこと――この老作家の人のよさに暗然とするほかはないのである。

粛清の嵐が荒れ狂い、ジッドの『ソヴィエト紀行』をめぐる論争がにぎやかだったこの年に亡命作家の大物を自分の陣営に確保することは、スターリン体制べったりで反対派攻撃に終始した「インターナツィオナーレ　リテラトゥーア」にとっては好都合なことであった。三九年のスターリン六〇才の誕生日には五〇ページを割くことまでして、H・A・ヴァルターに「ソヴィエト史の意識的な歪曲、捏造をした」[28]と評されている同誌に、ハインリヒ・マンは、糊口の手段がかかっていたのでもあろうが、情勢が見えないばかりに、利用されているのである。彼はたしかに、フォイヒトヴァンガーのようにジッド批判もソヴィエト紀行も書かなかったし、ついにソ連を訪問しなかった。亡命先にもなぜかヴィザが下り、招待を受けたソ連でなく、危険を冒してアメリカへ行く道を選んだ。けれども彼はもはや亡命者全体に呼びかけ、力づけているのではなく、結果的に亡命者内部の対立する陣営の一方の側に加担してしまっている。彼はウルブリヒトがパリで人民戦線運動を共産党の支配下におこうとするやり方への不満を手紙でもらしてもいるし、[29]ウルブリヒトはモスクワへ召喚されもした。ハインリヒ・マンは超党派の理想を抱いていたから、共産党にある時期不満を抱いたのは当然であろう。けれども彼の不満が当事者以外のものの目に印象づけられたとは思えない。人民戦線運動の議長ハインリヒ・マンは、モスクワ支持の態度を明確にしたと映ったに違いない。のちにカリフォルニアのハインリヒ・マンにDDRから帰国要請が来る必然性はこの頃からあったのだと言うことができる。ただ、すでに明らかなようにハインリヒ・マンの社会主義理解は、ワイマル共和国時代と、あるいは亡命初期、と言っても数年前に過ぎない『憎悪』の論説とくらべて見ると、ソヴィエト連邦の名前が出てきたことと民衆の役割への期待が大きくなったことを除くと、実体はほとんど変わっていないのである。知識人は以前には民衆を導くものであったのが、民衆とともに文化の防衛にあたる

とされている。しかし、知識人の主導権が断念されたわけではない。同じ三七年のスペインで開かれた第二回国際作家大会へのメッセージでも彼はそう述べて、ここでも実例としてソヴィエト連邦の名をあげている。

フランス亡命時代のエッセイについては、もはやこれ以上の検討は不要であろう。

（四）『一時代は検閲される』

一九四〇年九月一二日、六九才のハインリヒ・マンは、妻ネリイ（前年九月九日結婚）、甥のゴーロ、フォイヒトヴァンガー夫妻、ヴェルフェル夫妻らとともに、ベンヤミンが通ったポル　ボウを経由して、ピレネーの山道を越えてスペイン入りした。一行はリスボンから乗船してアメリカへの再亡命に成功した。トーマス・マン、ヘルマン・ケステンらが一〇月一三日ニューヨーク港に出迎えると、ハインリヒ・マンは何才も老けて、疲れきっていたという。以後アメリカでは無名だった彼の苦難の時代がはじまる。

アメリカ入りの名目は映画会社メトロ　ゴールドウィン　メイヤーおよびワーナー　ブラザースとシナリオライターの契約を結ぶことだったから、ニューヨーク到着の一カ月後には彼はハリウッドにおもむいた。ここでデーブリン、ヴェルフェル、A・ノイマン、L・フランク、W・メーリングらと年俸千ドルで契約期間の一年を過ごしたが、往年の『嘆きの天使』の原作者も目立った仕事はできなかった。まもなく生活に困ったハインリヒ・マン夫妻は、毎月トーマス・マンの援助を受けることになる。フランスでつねに亡命文学者たちのまとめ役であった彼が、アメリカで妻と二人で逼塞してくらし、影響力を失った様子を端的に物語るのは、彼が雑誌に書くエッセイの点数が激減した事実である。DDR芸術アカデミー刊行、E・ツェンカー編の『ハインリヒ・マン作品書

誌』によれば、アンケートに答えたものなども含めて、四一年二編、四二年四編、四三年七編、四四年九編、四五年九編、四六年四編、六年間に合計三四編、フランス亡命時代の一割にも満たないという寂しさである。[30] 四三年からわずかに増加したのは、まもなく述べるメキシコの「フライエス　ドイチュラント」に掲載したためで、これが一二編、つづいてニューヨークの「ザ　ジャーマン　アメリカン」に七編となっている。新聞、雑誌に書けないということは、影響力と収入源がなくなったことを意味する。すでに『アンリ四世の完成』は、ミュンヘン会談のあとの国際関係が悪化した時に出たためあまり売れなかったし、亡命者をめぐる諸情勢がきびしいものとなった三八年、三九年ごろから、彼の本の売れ行きは悪くなっていた。ソ連の元外相（外務人民委員）として一時代を築いたマクシム・リトヴィノフが四一年から四三年までアメリカ大使を勤めていたあいだは、ソ連側が支払う原稿料を届けてもらえたが、それも絶える。

四一年以後の彼の仕事で紹介に値するのは、長編小説『リディーツェ』と戦後に刊行された二冊の長編小説を除くと、ひとつはメキシコに亡命していた共産党の文学者たちとの接触、いまひとつは長大な回想録『一時代は検閲される』である。とくに後者は、先にあげたマティアス、バウアーなどによってハインリヒ・マンの共産党への接近の証拠とみなされたものである。

四二年二月六日A・アーブッシュ（三五年～三九年共産党の非合法の機関誌「ローテ　ファーネ」の前編集長でフランスの収容所を脱走して、四一年末にメキシコへ亡命）がメキシコからハインリヒ・マンに接触をもとめて来た手紙にはじまる、主として旧知の仲のパウル・メルカー（ウルブリヒトの下でパリの共産党人民戦線準備委員会の代表のひとりだった。ハインリヒ・マンはモスクワの共産党の中執へウルブリヒトとメルカーのことで、

苦情の手紙を出したことがある。四二年メキシコへ亡命）との、四六年五月六日後者がDDRへ出発するまでつづいた往復書簡は、雑誌「フライエス　ドイチュラント」を機関誌とするメキシコ在住の「ラテンアメリカ自由ドイツ人委員会」（ゼーガース、L・レン、E・E・キッシュ、B・フライ、B・ウーゼなどが所属）から、ハインリヒ・マンあての機関誌への執筆依頼と、同会の名誉会長就任要請と、出版部門エル　リブロ　リブレ（ドイツ語でダス　フライエ　ブーフ）から長編小説『リディーツェ』を出版するよう依頼した手紙およびそれらへのハインリヒ・マンの返事からなっている。エル　リブロ　リブレは、四二年五月の創設から四六年六月活動を停止するまでに『リディーツェ』のほかにゼーガースの『第七の十字架』、フォイヒトヴァンガーの『悪意をもつフランス』、テオドール・プリヴィエの『スターリングラード』などドイツ語で二一点、スペイン語で五点の小説、時事評論を出版している。ハインリヒ・マンは委員会の活動方針に賛成して、要請のすべてを承諾し、郵便の検閲のために手紙が二、三週間かかる不便さに悩まされながら、その対策に英語の手紙や電報もまじえて、原稿の仕上がりぐあいを報告し、原稿料の交渉をし、「はじめてプロレタリアの生活を経験」[31]している現状にもふれ、送金を督促している。雑誌に載ったエッセイについてはとくに注目すべきものはない。手紙で引き受けた名誉会長職でメキシコの地を踏むことはなかったとはいえ、これは戦争中のアメリカ亡命時代の彼の唯一の活動と言えるものであった。雑誌の方では四六年彼の写真を表紙に掲げて、七五才の記念号を出した。ともかくこの雑誌は彼のこの時期のとぼしい情報源の中では有力なものであった。なおブルジョア作家では彼のほかにフォイヒトヴァンガーが活発に寄稿していた。また委員会のメンバーの多くは戦後DDRに迎えられることになる。

回想録『一時代は検閲される』は、彼のメモによれば四二年四月五日に執筆を開始し、長い中断の時期をはさ

んで四四年六月六日、連合軍のノルマンディー上陸の日に原稿が完成している。この時彼は七三才である。手紙で見るかぎり中断の原因は長編『社交界の歓迎』の場合と同様、すぐに出版社が見つかって原稿料が入る見込みがなかったためと思われる。

さて『一時代は検閲される』にフランス亡命時代以後のハインリヒ・マンの思想の発展や情勢分析の進歩を期待することはできない。彼は、すでに述べたように、情報から疎外されていたからで、ソ連をめぐる情勢にしても、メキシコから入る偏ったわずかな情報以外に頼るものをもたなかった。

トーマス・マン、ブレヒト、ヴェルフェル、フォイヒトヴァンガーなどは、カリフォルニアでも活動をつづけることができたが、ハインリヒ・マンの場合は貧困と自作の反響のなさに苦しんでいたデーブリンの立場に似ていたのだった。

ともあれ、『一時代は検閲される』は、ハインリヒ・マンをソ連のシンパとみなす（称賛と非難と立場は正反対だが）議論の有力な証拠とされている。彼はここでは、古くなった情報にもとづいてソ連に彼自身の願望を投影している。すなわちナチスの恐怖政治と正反対の理想の国を見ようとしているのであるが、そのソ連に託した願いはすでに人民戦線運動に従事していた頃発表された『実現された理念』などに見られたのと同じものである。なお、彼が希望を寄せ、称賛したのはなにもソ連にかぎるものではなく、老境に入って寛容になったのか、ナチス以外ならすべて望ましいと言わんばかりに、同時代のイギリスとフランスをも彼はドイツと対比して賛えているのであって、長大な回想録からとくにソ連に関する二つの章だけを取り出すのは片手落ちなのであるが、ともかくその二つの章でハインリヒ・マンは後世の研究者たちに言質をとられることになったのである。「ソヴィエ

ト連邦」の章は「インターナツィオナーレ　リテラトゥーア」にも掲載され、発表当時はソ連賛美の役割をも果たしたのであるから、やむを得ないことかもしれない。彼のソ連像が、その願望がいかに理論的分析、すなわち現実のソ連像からかけ離れていたかは以下に示す通りである。むしろこの明白な事実から目をそむけてハインリヒ・マンの発言にいわば尾ひれをつけたり、その発言だけを切り離したりして称賛するか、逆に非難の論拠にする者が多く出たのは、文学研究の仮面をつけた冷戦の論理のなせるわざだったのだろう。

たとえば第二章である「ソヴィエト連邦」の章を開くと、すぐに以下のような表現に出会う。「まさに彼（スターリン）こそは、もっとも知識人の優位を放棄することのない人である。」「ソヴィエト連邦は以前から大いに真理を愛していたからこそ、戦争に勝利することができた。」「フランス革命のロシア革命からの距離は、ただ時代の差によるだけのものであって、真理愛の度合いが違うからではなく、人間の義務が違った風に理解されたからではない。[32]」

第一の引用は、ハインリヒ・マンの年来のテーマである「行動する知識人」「理性の独裁」の典型を彼がスターリンを見ていることを示しているが、この個所を切り離すのでなく回想録の他の章との関連で見れば、彼はルーズヴェルト、チャーチル、ド　ゴールをも――現在の読者にはいささか滑稽だが――同じ言葉で賛え、アンリ四世の末裔たちとまでみなして期待を寄せたのだった。第二、第三の引用が示すことは、彼の理想がワイマル共和国当時と同じくフランス革命の理念であること、彼が述べていることがいかに理論的分析からほど遠いものであるかということ、従ってこれらの言葉を理論的に分析すること、言い換えればこのはなはだしい現実離れを当時の現実と結びつけて解釈し、情勢の変化に応じた彼の発展を論じるのがいかに無意味であるかを示している。こ

こには人民戦線運動以後の発展と言える要素はなにもない。――このことを確認すればわれわれの仕事はもう終わっているのではないだろうか。

さらにソ連に関する個所だけを取りだして引用をつづけたとすれば、そこから明らかになるソ連像は、平和を愛する国で、そこでは自由と平等が達成され、従って理性が尊重され、知識人はその使命を実現することができる。ロシア革命は一九世紀のロシア文学、すなわちトルストイやドストエフスキーらの精神を実現したものだとされる。かくして粛清も独ソ不可侵条約も、体系的にではなく散発的にソ連に感情移入した表現で容認される。

このように要約してしまうと、作家はソ連のシンパ以外の何者でもないと思えるかもしれない。しかしながら、彼の回想はソ連賛美を目的とするものではないから、その種のものにありがちな押しつけがましさや資本主義攻撃がない。言ってみればソ連の名をかりた夢物語なのであるから、そこでは具体的な政策なり、市民生活なりが擁護されているわけではない。それに、もう一度繰り返せば、彼がほめ過ぎたのはソ連だけではなく、過去の自由の伝統にことよせてイギリスもフランスも現実とは関係なくほめちぎったのである。ただ、ハインリヒ・マンが慎重さを欠いたことは責められるべきかもしれない。夢物語は社会主義体制の現実への賛歌に読み換えられてしまったのだから。いずれにしても、彼はここでは幻のソ連像に託して、彼の見果てぬ夢とも言うべき年来の理想を語ったのである。現実のソ連がどう変化しているかといった問題は、もはや孤独な老作家の念頭をよぎることはほとんどなかったと思われる。

H・A・ヴァルターは、ハインリヒ・マンをマルクス主義から遠ざけたものこそが彼にスターリニズムの本質を見えなくさせた、と言う。つまり第一の引用にも見られる「精神」がすべてを支配すべきであるとする主張は、

彼を一方では唯物史観から遠ざけたし、「精神」不在の状況を攻撃する時有力な規範となりつづけたが、他方理性と進歩に味方すると見えてそうではない者が現れた時、その内実を見抜く力をもっていなかったというのである。[33] 要するに彼のフランス流の合理主義はスターリニズムという怪物の前では限界を露呈することとなり、あまりに信じやすい彼は粛清の仕組を見抜けなかったというのであるが、このあたりがハインリヒ・マンに対してもっとも公平な見方と言えるであろう。アメリカでさらにはなはだしくなった現実離れの傾向も、実は『臣下』（一九一四）の風刺や、早くからのナチス批判や、外国の王の物語を書かせたのと、いや、さらに言えば『女神たち』（一九〇一）の頃の異国趣味と唯美主義を生んだのと同じ土壌から育ったものなのであった。彼が批判者の役まわりを捨てて肯定的理想を鼓吹した時には、亡命のはるか以前の唯美主義と行動主義のいずれの時期にもすでに、状況の誤認や失敗作という結果をも生んで、少数の熱狂的読者にはなお喝采されたが、敵意をもつ批評家には酷評され、トーマス・マンには『非政治的人間の考察』を書かれたのだった。ハインリヒ・マンの名声が亡命時代に大きかったことと、『一時代は検閲される』の刊行後まもなく冷戦がはじまったことが不幸のはじまりであった。

〔注〕

(1) Abusch, A.: Heinrich Mann an der Wendepunkt der deutschen Geschichte und Literaturgeschichte. In: Arbeitshefte der Deutschen Akademie zu Berlin: Heinrich Mann am Wendepunkt der deutschen Geschichte. Internationale wissenschaftliche Konferenz aus Anlaß des 100. Geburtstages von Heinrich Mann. März 1971, S. 17

(2) Matthias, K.: Heinrich Mann 1971-Kritische Abgrenzungen. (Nachwort des Herausgebers) In: Heinrich Mann 1871–

1971. Bestandsaufnahme und Untersuchung. Ergebnisse der Heinrich-Mann-Tagung in Lübeck. Hrsg. v. K. Matthias, München 1973, S. 404

(3) Wittig R.: Die Versuchung der Macht. Essayistik und Publizistik Heinrich Manns im französischen Exil. Frankfurt a. M., Bern 1976

(4) Kießling, W.: Heinrich Mann an der Seite der KPD. In: Arbeitshefte... S. 99–106

(5) Gert Bauer/Peter Stein: Heinrich Mann im Exil. Standort und Kampf für die deutsche Volksfront. In: Antifaschistische Literatur. Programme Autoren Werke. Bd. 1 Kronberg/Ts. 1977, S. 53–141

(6) Herden, W.: Geist und Macht. Heinrich Manns Weg an die Seite der Arbeiterklasse. Berlin (Aufbau Vlg.), 1971

(7) Mann, H.: Ein Zeitalter wird besichtigt. Bern, Weimar 1973, S. 178

(8) Kantorowicz, A.: Fünf Jahre Schutzverband deutscher Schriftsteller im Exil. In: Das Wort, Dez. 1938, S. 67

(9) Betz, A: Exil und Engagement. Deutsche Schriftsteller im Frankreich der dreißiger Jahre. edition text＋kritik (München) 1986, S. 114

(10) Walter, H.–A.: Deutsche Exilliteratur 1933–1950 Bd. 2 Asylpraxis und Lebensbedingungen in Europa. Darmstadt, Neuwied 1972, S. 45

(11) Jasper, W.: Heinrich Mann und die „Deutsche Volksfront". Mythos und Realität intellektueller Ideenpolitik im Exil. In: Exilforschung. Ein internationales Jahrbuch Hrsg. im Auftrag der Gesellschaft für Exilforschung von T. Koebner, W. Koepke u. J. Radkau Bd. 1 Stalin und die Intellektuellen und andere Themen. edition text＋kritik (München) 1983, S. 48–49

(12) 拙論『ハインリヒ・マンの長編小説「首領」について』「ドイツ文学研究」報告第三四号　一九八九年　京都大学教養部ドイツ語研究室　五〇―七九ページ参照。

(13) Mann, H.: An die Wähler zum Reichstag. In: Ausgewählte Werke in Einzelausgaben. Hrsg. im Auftrag der Künste zu Berlin von A. Kantorowicz, 1956, Bd. 13 (Essays II), S. 151–153

(14) Mann, H.: Der Haß. Deutsche Zeitgeschichte. Berlin und Weimar 1983, S. 9–44

(15) Mann, H.: a. a. O. S. 86
(16) Wittig, R.: a. a. O. S. 397
(17) Mann, H.: Der Haß. S. 89, S. 105
(18) Mann, H.: Verteidigung der Kultur. Antifaschistische Streitschriften und Essays. Berlin, Weimar 1971, S. 136
(19) Mann, H.: a. a. O. S. 140
(20) Mann, H.: a. a. O. S. 395
(21) Mann, H.: a. a. O. S. 277
(22) Mann, H.: a. a. O. S. 241–246
(23) Reich-Ranicki, M.: Thomas Mann und die Seinen. Stuttgart, 1987, S. 109–151 彼は、結局トーマス・マンの全作品を否定する。
(24) Abosch, H.: Von der Volksfront zu den Moskauer Prozessen. In: Exilforschung. Ein internationales Jahrbuch. Bd. 1, S. 27–44
(25) Lyon, J K.: Brecht und Stalin—des Dichters „letztes Wort." a. a. O. S. 120–129
(26) Wittig, R: a. a. O. S. 414
(27) Mann, H.: Verteidigung der Kultur. S. 435–438
(28) Walter, H.-A.: Deutsche Exilliteratur 1933–1950 Bd. 7 Exilpresse. Darmstadt, Neuwied 1974, S. 183
(29) Jasper, W.: a. a. O. S. 52
(30) Zenker, E.: Heinrich-Mann-Bibliographie. Werke. Berlin, Weimar 1967, S. 207ff.
(31) Kießling, W.: Alemania Libre in Mexiko. Bd. 2 Berlin (Akademie Vlg.) 1974, S. 376
(32) Mann, H.: Ein Zeitalter wird besichtigt. S. 32–33
(33) Walter, H.-A.: Heinrich Mann im Exil. In: Text+Kritik, Sonderband Heinrich Mann. Hrsg. v. H L. Arnold München 1971, S. 135